

国内事例  
in Japan

2

## 地域資源を健全に次世代に引き継ぎたい 黒川温泉郷における資源循環の挑戦



黒川温泉全体図

「私どもの取り組みはまだまだ大きなものではなく、まず小さな仕組み作りからです。」

「サステナアワード2020伝えた日本の“サステナブル”にて、黒川温泉の堆肥事業『黒川温泉一帯地域コンポストプロジェクト』が環境省環境経済課長賞を受賞した。

冒頭はこのプロジェクトを主幹する黒川温泉観光旅館協同組合事務局の北山元さんの言葉だ。

日本の里山を代表する先進的な取組の背景には、一体どのような地域内外の協働の姿があるのか。北山さんにお話を伺った。

### 黒川温泉 2030年ビジョン

熊本・阿蘇にある黒川温泉は、旅館30軒と商店34店舗で形作られた里山の温泉街である。年間の平均訪問者数は宿泊で約30万人、日帰り入浴利用者を含めると約90万人にのぼる、九州を代表する温泉街だ（※年毎の社会情勢により変化あり）。域内で間伐した竹の利活用の一環でもある冬の風物詩『湯あかり』が灯る幻想的な風景や、『入湯手形』を使って豊富な泉質を堪能できる露天風呂湯めぐりなどの独自の取組に長年のファンも多い。

旅館組合には現在25名のオーナーが所属し、そのうち6名が組合の理事、19名が組合員、そして事務局長である北山さんが中心となって、今後の黒川温泉の全体観を話し合う活動を行っている。

2021年には組合設立60周年を迎え、これからの黒川温泉が目指すべき未来像を言語化した『2030年ビジョン』が組合を中心に取りまとめられた。

ビジョンのコンセプトは『世界を癒す、日本里山の豊かさが循環する温泉地へ』。地域資源を循環させ、可能な限り廃棄を減らし、より豊かな状態で黒川の自然や景観を次世代

に引き継ぐ仕組みの構築を目指して、「黒川温泉一帯地域コンポストプロジェクト」、「次の百年を作るあか牛“つぐも”プロジェクト」や「次世代リーダープログラム黒川塾」など様々な取組が実践されている。

「現在の旅館組合は30～40代の同世代のメンバーが中心で、和気あいあいとした雰囲気です。これまでの黒川をつくってきた先代たちも“まずはやってみろ”と応援してくれていて、色々なことにチャレンジしやすいという強みがこの地域にはあると思います。」北山さんはこう語る。

## 黒川温泉とサーキュラーエコノミーの出会い

取材を通して、黒川温泉2030年ビジョン策定の背景には大きく2つのファクターがあると感じた。

ひとつは2016年の熊本地震や2020年のコロナ禍などの自然の驚異に地域一丸となって乗り越えてきた経験だ。熊本地震に際しては、黒川温泉はもちろん一次産業をはじめとする南小国の地域経済も大きな打撃を受け、観光業における他産業への影響力の大きさを目の当たりにし



黒川みらい会議の様子

たという。そこで黒川温泉の枠を超えた地域の資源を健全な形で次世代に引き継ぐための協議の場として、旅館組合、観光組合、自治会の三者で「黒川みらい会議」という

枠組みが2018年に発足した。約半年間で6回開催されたこの会議では、南小国町の顧問だった枝廣淳子氏（有限会社イズ 未来共創フォーラム）の参画もあり、SDGsや地域内経済循環の視点も踏まえて地域全体が目指すべき将来像についてメンバー間で整理がなされた。地域の各主体と専門家の知見を融合した議論をベースに、今後の黒川温泉の活性化のための強化指針として、食・人財・サステナブルの3つのテーマが見えてきたという。現在着手されている様々な取組は、根本の部分で2030年ビジョンとつながっていて、各テーマから循環型地域システムの実現を目指している。

もうひとつは、黒川地域の魅力に惹かれて参画する域外の専門家とのつながりだ。

前述したコンポストの取組にはサーキュラーエコノミー研究家の安居昭博氏、農家兼コンポストアドバイザーの鴨志田純氏との出会いがあった。協働にあたっては、関係者間の交流の場や地域での食



コンポストプロジェクトの様子

事会といった機会でのコミュニケーションを通じた対等な関係性の構築が基軸にあるという。そして「黒川みらい会議」で話し合われた黒川の将来ビジョンを域外の方とも共有し、それぞれの強みや創造性を尊重し合う形で多様な企画やものづくりが進められている。これはまさに黒川地域独自の協働の姿といえるだろう。また、こうしたつながりの起点となっているであろうウェブサイトやSNSを活用した黒川温泉の発信の工夫にも言及したい。発信やブランディングにおいては、気張らず、黒川の日常の魅力を伝えていくことを意識しているという。

## Learning by doing —やりながら学ぶ—

「循環はいち事業者だけでできるものではないと思っています。それぞれの強みを生かし、地域の資源を活かせる仕組みを2030年までに構築したい、そのための行動をし続けたい、それが今の想いです。」

想いが点から線に、線から面となり協働が加速していく。黒川温泉のこれからと取組の進展を祈念したい。